恥ずかしながら

大津　隆文

恥ずかしながら去る九月六日の日本経済新聞俳壇に私の句が入選した。句は「風鈴や知らぬ間に妻家になく」。選者の評があり、「解釈を微妙にとまどわせる句ではある。家に居ずではなく家になくだ。ひそかにも気づく不在」とあった。たしかに推敲の過程で「妻消えにける」案も浮かんだので、選者の読みのような雰囲気も漂ったのかもしれない。

新聞に投句するようになったのは俳句を始めてすぐの約十五年前のこと。以来毎週一回三句の投句を続けている。この間入選したのはやっと二十六句で、平均すれば一年に一回強。本当にフロックだが、それだけに載った時の嬉しさは格別だ。自分でいい句と思っても入らないし、思ってもいなかった句が入ることもある。結局は、下手な鉄砲も数打ちゃ当たる、であろうか。

入選した中で自分が気に入っている句は「砂の城砂に返して夏逝けり」。グアム島に行った時早朝に砂浜を散歩していて浮かんだ句だ。その外「二日酔蛍袋に眠りたし」「新緑やこんな時間に酒を酌み」「林立の銚子うれしき年忘れ」といった酒好きの句が採られたのも楽しい思い出である。

また選者によっては投句を手直ししてくださる。印象に残っている例は、「猪の掘りたる腐葉土の温し」、私の投句は「猪掘れる腐葉土なほも温きごと」だった。客観的にありのままを述べるだけでなく、思い切った省略、断定も句作には必要と教えられた。

「月光あまねし白木の仮位牌」、原句は「月光の中の白木の仮位牌」で、厳格な五七五から離れた破調の方が時には景が鮮明になることを知った。

「逝くわれの最後は妻の鰯丼」、元の句は「逝くならば最後は妻の鰯丼」で、この修正は正直な所今ひとつピンとこないが、己をはっきり出せということだろうか。

出しても出してもボツが続くと気が滅入る。だが、日常の身の回りに俳句の材料を見つけた時のときめき、自分なりにいい句が出来たと感ずる時のうれしさ、そんなささやかな喜びを励みに句作りを続けていこう。